

ジョナサン・エドワーズとリバイバルに関する一考察

茂 義 樹

はじめに

本稿はジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards, 1703. 11. 5-1758. 3. 22) によって指導され、マサチューセッツ州ノーサンプトン (Northampton) において1734年に始まったリバイバル (信仰覚醒) の模様とその神学、その後の展開における論争点を取り上げようとするものである。このノーサンプトンにおけるリバイバルはアメリカ宗教史上初めてのものであり、1740年ニューイングランド地方に広がった信仰大覚醒運動 (Great Awakening) の導火線となった。リバイバルはそれ以降もたびたび繰り返され、アメリカ宗教史の一つの特徴となっていくが、それらの先駆けとなったものがエドワーズによって指導されたのである。まず簡単にエドワーズの生涯とリバイバルに至る宗教的状况について述べてみよう。

1 生涯 ジョナサン・エドワーズはコネチカット州イースト・ウインザー (East Winstor) で牧師ティモシー・エドワーズ (Timothy Edwards, 1669-1758) の五番目の子供 (長男) として1703年生をうけた。1716年イエール大学 (Yale College) に入学し、カレッジと二年の神学校生活を終えた。卒業後ニューヨークの長老教会の牧師とイエール大学のチューターをそれぞれ短期間つとめる。1727年23歳のとき、母方の祖父ソロモン・ストダード (Solomon Stoddard, 1643-1729) の牧するノーサンプトン教会から副牧師に招かれ、同教会に赴任した。1729年老ストダードの死に伴い、彼が同教会牧師に就任する。26歳の冬のことである。

青年牧師エドワーズは巧みな説教と道徳的改革運動によって次第に影響を与え、1734年秋

の一少女の回心をきっかけにして、それから6カ月で300人の回心者を得た。これがリバイバルであった。1737年にはノーサンプトンのリバイバルは下火になったが、ニューイングランド各地に広がり、ジョージ・ホイットフィールド (George Whitefield, 1714-71) の巡回説教とあいまって、1740年から42年にかけて各地で最高頂に達した。エドワーズはそのリバイバルを推し進めた中心人物のひとりでもあった。

1748年エドワーズはノーサンプトン教会入会の条件として会衆の前での回心体験の告白を要求したところ、教会の有力メンバーの反対を受け、1750年同教会を辞任するに至った。1751年から傷心の彼はマサチューセッツ州ストックブリッジ (Stockbridge) でインディアンの教育と伝道にあたったが、同時に多くの著作を執筆した。1754年プリンストン大学から総長の指名を受け就任した直後、種痘のため永眠した。54歳であった。

2 宗教的状况 ニューイングランドのキリスト教はピューリタニズム (Puritanism) とよばれ福音主義 (Evangelicalism) の伝統にたつものであった。それは聖礼典と信仰告白文を中心に信仰をとらえようとする sacramentalism (Sacramentalism) ではなく、イエス・キリストを救い主として告白する回心体験の告白を教会入会の条件とするものである。またその倫理は、「もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか」¹ の精神にたつて、神の意志に服従する素直な生き方を選びとろうとした。こうした回心体験と選ばれた神の民としてふさわしい倫理を模索しながら

1. 『新約聖書』ローマ人への手紙 8: 31。

生きる歩みは、信仰生活と日常生活の間の緊張を生みながら、動的な生き方を開いていく。これがニューイングランド移民の第一世代の目指したものであった。

ニューイングランドにおけるピューリタンの第一世代の子供たちは幼児洗礼を受け、成長してから会衆の前で回心体験を告白して教会の陪餐会員となっていた。しかし、なかには幼児洗礼を受けたものの、信仰告白をしない人たちもでてきた。そうした人たちに子供が生まれたとき、果たしてその子供に幼児洗礼を授けるのを認めるかどうかで論争が起こった。1662年マサチューセッツ州の教会総会 (Synod) は未陪餐会員の子供たちの幼児洗礼を認める決定を下した。これを半途契約 (Halfway Covenant) と呼ぶ。この決定によって「見ゆる聖徒」の交わりの場であるべき教会の体質は確実に変えられていった。

さらにソロモン・ストダートは陪餐会員と半途会員の区別をも廃止して、すべての受洗者の聖餐式への参与を認め、また回心体験がなくても信仰箇条を守る成人への受洗を認めるに至る。それは福音主義の伝統からの変質であった。またこうした行為はただ神によって救われる信仰を強調するカルピニズムから離れて、人間の努力による救いを主張するアルミニアニズム (Arminianism) への接近を明白にするものであった。

エドワーズはこうした傾向に歯止めをかけて、ピューリタニズムの原点である信仰告白と、「見ゆる聖徒」としての倫理を再び植えつけようとした。その回心体験の告白と交わりが他の者を感化して、集団的な回心者の群れを生んでいったのである。²

I リバイバル

半年で300人の回心者を出したというノーサンプトンのリバイバルとはどのようなものであったのだろうか。ここではジョナサン・エドワーズ自身の著わしたリバイバルの記録『回心に

2. C. C. Goen, "Editor's Introduction", *The Works of Jonathan Edwards* IV, p. 1ff. 参照。

おける驚くべき神の業の信仰的記録』*A Faithful Narrative of the Surprising Work of God in the Conversion* (1737年。以下『信仰的記録』と略記)によって、その実態にふれてみたい。

ノーサンプトンとは同書執筆時の1736年で82年の歴史をもち、200家族が住んでいた町である。牧師はエリザー・マザー (Eleazar Mather, 1637-69, 在任1661-69), ソロモン・ストダート (在任1669-1792) について、三代目がエドワーズであった。ストダート在任中も小規模の集団回心は何回かあったようだが、人数は伝えられていない。ストダートの死後は宗教不振のときで、青年たちは夜飲み歩いたりして、歓楽に身を委ねた。彼らは家庭を省みず、その生活を破壊した。

1734年になって一部の青年たちが教会の訴えに耳を借すようになった。安息日の夕方には社会講演と交わりの場が設けられたが、講演の前に説教が行われ、道徳改革が訴えられた。父親にも同じことが勧められ、家族の合意によって家庭を治め、決められた時間に青年たちが家に帰ることが要請された。青年たちは説教で語られたことを確信すると宣言し、引き続き集会にも出席した。³

町から少し離れた村でも覚醒があった。そこではある青年の突然の病死が青年たちに影響を与えた。また救いを確信していた婦人が亡くなったが、彼女が神の恵みに感謝しながら永眠したことが、同村の人びとへの警告となりまた慰めとなって感化をおよぼした。

同年秋、青年たちに安息日の講演会終了後も残るように要請したところ、彼らは応じた。そこで町の数カ所で数人ずつ分けて集会をもった。青年の集会が始まると、老人たちも同様の集会を始めた。エドワーズはその内容については述

3. Jonathan Edwards, *A Faithful Narrative of the Surprising Work of God in the Conversion in The Works of Jonathan Edwards* Vol. IV, p. 140ff. 以下 *A Faithful Narrative* は F.N. と略記し、末尾の頁数は *The Works* の頁数を示す。以下同じ。

べていないが、この小グループの集会はその後リバイバルのあるところで、必ず行なわれるようになっていく。

その頃アルミニウムに関する話が伝えられた。多くの人びとがこのことで神がこの世から離れられるのではないかという恐れから、ただ神の恩恵によって救われる、という信仰義認説を信奉した。⁴

1734年12月後半に入って、5—6名の者が救いへの回心を明らかにした。ある若い婦人が神の無限の力や恵みの業を証しし、多くの人びとを覚醒に導いた。リバイバルだけが町の一般的な関心事となり、すべての会話がこの話題に集中した。この世的な事柄の多くが拒否され、宗教的訓練に時間が費やされていった。彼らの関心は全員が救われることに集中した。キリストの守りの外にいることは恐ろしいことであり、地獄に落ちる危機であることが語り合われた。老人、青年を問わず、来たりつつある神の怒りから逃れて、救われることを求めた。1735年春から夏にかけて、多くの人びとが回心し、救いの確信をもち神を賛美した。今までにこの町がこれほど愛と喜びに満たされたことはなかった。ほとんどの家庭で神を賛える喜びにあふれた。両親は子供の回心を、夫は妻の、妻は夫の回心を喜んだ。酒場に人足はとだえ、結婚式は歓楽の場から霊的歓喜の場となった。⁵

町の外の人たちがこの町に来て、リバイバルの状態を知って驚き、帰って人びとに伝えた。その話を聞いて、近隣の町から多くの人たちが演説や説教を聞きに集まって来た。彼らも感化を受け救いを確信して彼らの町や村へ帰っていきその地で感化を与えた。こうして信仰覚醒はノーサンプトン周辺の町や村に広がっていった。*The Works of Jonathan Edwards* 第四巻の編者ゴーエン (C. C. Goen) の調査によれば、1734から35年にニューイングランドでリバイバルのあった地方は、主としてコネチカット川河畔の町や村であるマサチューセッツ州15カ所、

コネチカット州17カ所である。⁶

エドワーズはノーサンプトンでのリバイバルの成果を明らかにする。回心者は半年で300名あり、8週間毎の聖餐式への陪席者は以前の100名から630名になった。回心者の中にはかつての回心体験をもっている者もあり、40年前(50名)、50年前(20名)、60年前(10名)、70年前(2名)の回心者が改めて回心した。子供の回心者も多く、10—14歳30名、10—9歳2名、4歳1名も含まれており、この数をまとめると、壮、老年者82名、14歳以下33名で、回心者の3分の1が子供と中・高齢者であることが分かる。⁷これによって教会出席者が増加したのでノーサンプトン教会は会堂新築にのりだすことになる。

このノーサンプトンのリバイバルは突然水をさされる。1735年5月、町の有力な商人ジョーゼフ・ハウレイ (Joseph Hawley, 1682-1735) が首を切って自殺したからである。彼は道徳や宗教について良く理解する人であったが、メランコリーの家系にあり、このリバイバル中にメランコリーが生じ、絶望的となり自殺をはかったという。これが町の人びとに衝撃を与え、以前のような多数の回心者はみられなくなった。エドワーズはそれを神の霊が町を離れ始めた、と表現する。しかし、回心者はなお続き、小集會も継続され青年たちも以前のような不道徳な生活に戻っていないとし、「山の上にある町は隠れることができない」⁸を引用してこの著を終わっている。⁹これがノーサンプトンのリバイバルのあらましであった。

II 回心の心理

エドワーズの『信仰的記録』においては、上述したようなノーサンプトンのリバイバルの経過の記録にとどまらず、回心者の心理を見事に描き出し、同時にそのリバイバルの神学思想も論じられているので、次に紹介しよう。

回心体験は個人によってさまざまである。しかしその中から一つのパターンを見いだすこと

4. *F. N.* p. 147f.

5. *F. N.* p. 149ff.

6. "Editor's Introduction", p. 28f.

7. *F. N.* p. 157f.

8. 『新約聖書』マタイによる福音書 5; 14.

9. *F. N.* p. 206ff.

ができる。それは次の四段階にまとめることができよう。まず第一段階は平安のうちに神の義を発見することに始まり、次にどうして神が自分を救い給わないかという疑いをもつ第二段階に入る。第三段階の徹底的な自己不信をへて、第四段階のキリストによる救いの発見がある。この最終段階では信仰にもとづく倫理的行為も伴うことになる。

まず第一段階は、今までの歩みが滅びの道であることに気づき、意識が改革され、神の救いに心が向けられる。この段階で罪や非道徳的な行為が中止される。他者への中傷、干渉がやめられ、酒場に行かず、家にとどまり、仕事以外では町の外に出ず、毎日が安息日のようになる。家では読書し、祈り、冥想し、掟を守り、小集会に参加し、牧師を家に訪ねる。¹⁰

第二段階では、自分は神に喜ばれる者ではないのではないかという恐れ、墮落への危機感に悩まされる。夜眠れなかったり、メランコリー状態になるなど、精神的、肉体的な苦痛を伴う場合もある。¹¹

第三段階に入ると、彼は絶望の淵に立たされる。彼の罪に対する神の怒りを知り、罪責感に圧倒される。その時彼は神に対する霊の存在を知る。その霊と戦わなければ、心の中の善は妨げをうける。もし彼が悪を恐れるならば、神は悪を追い出し、善に導かれる。絶望的な罪である自己信頼から抜け出す道はここにある。彼が罪の重荷、人間の墮落、神に対する敵意、心のおごり、不信仰、キリストの拒否、彼自身の意志の頑固さ等に気づいたときに、神は彼を覚醒し給う。そうすると彼は罪を告白し、宗教的義務を果たし、犯した罪を弁済しようとする。そして自分自身良くなったと考えるが、それは一時的にすぎず、すぐに自からの誤りを見つける。すると再び救いが遠のき、恐れが増し、またも失望に追いやられる。この失敗は神が彼の心と与えられた印を見ず、彼の祈りが聞かれているのを信じないからである。ときに神が彼を顧み

給わないと思ひ、神への反逆を試みるときさえある。その段階ではまだキリストの救いにあずからない。彼は自分自身の力で良くなろうと努力するが、さらに絶望に落ち込み、迷路に踏み込む。

最後に神は人が実りのない試みを繰り返す必要のないことを示される。神は人の意識を覚醒し、自己信頼を克服させ、神の前に塵として連れ出し給う。こうして第四段階に導かれる。¹²

覚醒した者は彼の罪を認め、それを非難される神の義を確信する。神の正義の発見前に彼の心は騒ぎ、乱れるが、発見後は平静な心になる。それは、彼自身には何の善き価値もなく、神によって非難されるべきものであり、それに対して神の救いは善きものであると感じるからである。彼は神の愛の恵み、無限の力、救いの力、彼のために尽くされること、真実と恵みを考える。ある者は神の恵みを、ある者は神の招きを、ある者はキリストの犠牲の愛と栄光に驚く。ある者はキリストの正義に、ある者は生ける神の子の神聖さに打たれる。そして彼の心の中に聖書の特別な一句が与えられ、福音の慰めをうける。¹³

最後に受ける確信は、神とキリストに従う熱望であり、神を知り、愛し、神の前に謙虚になってキリストに連なることである。この確信は神に永久に従うという決意を導く。彼自身の正義が取り去られ、罪に対する死を宣告されて、彼が喜びと満足に満たされるからである。回心を導くものは、彼のキリストへの信仰とキリストの配慮、および神の忍従である。回心した人は、回心の際に彼の以前の知恵や友人の忠告は何の意味をももたなかったと語っている。すべてを満たし給うキリストが突然彼の目を開き、心に働きかけ給うからである。¹⁴

以上においてエドワーズの『信仰的記録』によって信仰覚醒がどのように個人の心に起こり、展開してきたかを見てきた。そのなかで明らかな神学思想は信仰義認説につきる。人間の救い

10. *F. N.* p. 159ff.

11. *F. N.* p. 161f.

12. *F. N.* p. 162ff.

13. *F. N.* p. 168ff.

14. *F. N.* p. 172ff.

は人間の努力によるのではなく、神に対する信仰によってのみ、神から与えられる。人間はただ自己を悔い改め、一切の自己義認、自己満足を捨てて、キリストにのみすがるときに、神に迎えられ、真の救いに入れられるのである。これが再生(regeneration)である。ただ『信仰的記録』に見られるように、再生に至る過程は単純なものではなく、きびしい道のりである。人間が自己の努力によって救いをえようとするかぎり、救いは与えられない。それは将に地獄の苦しみである。しかし、自分を信頼することを諦め、キリストのみを信頼するときに救いが与えられる。ここに人間の努力を評価するアルミニアニズムは捨てられ、神の恩恵によってのみ生きるピューリタンの信仰の原点が取り戻されている。エドワーズの立場は New Lights (新しい光) といわれ、Old Lights (古い光) といわれるピューリタニズムを改革しようとしたのである。

III 宗教的感情

『信仰的記録』においてエドワーズは信仰による救いをテーマにして、回心の過程を語ってきたが、さらに個人の宗教的心理を掘り下げた著書に *A Treatise Concerning Religious Affections* 『宗教的感情論』(1736年。以下『宗教的感情』と略記)がある。リバイバルでは多くの宗教的表現があらわれる。本人が救われた体験をしたと告白したとき、それが真実なものか否かが問題となる。アルミニアニズムは勿論、ヒステリカルな回心や、知的訓練による回心等リバイバルから排除されねばならない要素も多くあった。その判断の指針として執筆されたのが『宗教的感情』である。

「何が神に受け入れられる決定的な救いのしるしなのか」が本書の前提である。エドワーズは本書の第一部で真の信仰とは神への敬虔さであり、信仰義認によって赦しをあたえ給もう神に対する信頼である、とする。これは個人の宗教的体験によってえられるものであるが、その神への敬虔さ、信頼をエドワーズは宗教的感情

と呼んでいる。しかしそれは人が起こすものではなく、神の霊が人の魂に神の恩恵として与えられた結果、湧きあがるものであるとする。

真実の信仰は聖なる感情である。感情の性質は意志と意向 (inclination) にある。意向は理性にもとづいて物事を判断しようとする。感情は自己の中心であり、統一の場である。それによって人生の基本的方向づけがあたえられる。こう述べることによってエドワーズはリバイバルのヒステリカルな反応を批判し、理解を伴った感情の概念の重要性を説く。¹⁵

神が求められる敬虔は、純粋な愛の中を神の栄光にむかう自己の意向である。神の言を聞くのみならず、魂が動かされ、神の愛に満たされているならば、この世での正しい行動が示される。それには魂が神の愛によって動かされていることと、方向づけられた意志と意向が必要となる。

真実の信仰の基礎は、神への愛を基礎とする宗教的感情である。愛の感情が宗教的生命を作り上げる。愛の果実は感情、喜び、熱心、平和である。愛は感情の源泉である。愛は神と人間を結ぶが、罪は愛の感情の欠如である。エドワーズはこう述べて一方で宗教から感情を排除しようとする人びとを、他方では狂言や熱狂主義者たちを批判する。¹⁶

第二部では消極的なしるし (sign) として、正しくない霊の状態をあげる。まずサタンによる霊の業は模倣であるとする。また多くのピューリタンが考えたように、救いが連続のプロセスによるという考えを否定した。すなわち規則による回心はなく、自然の状態から恵みへの変化は存在しない。また他者の感情を判断できるかどうかの問題では、他者を裁くことは絶対不可能であるという。これは顔を見て霊の状態を判断したといわれるジェームズ・ダーベンポート (James Davenport, 1716-57) への批判と

15. Jonathan Edwards, *A Treatise Concerning Religious Affections in The Works of Jonathan Edwards II*, p. 96f. 以下 *Religious Affections* は R. A. と略記する。

16. R. A. p. 98ff.

見られる。たとえ聖徒であっても、他人の心を区別する力はない。霊をテストするのは、自分自身だけである。見える教会における聖徒の受け入れは、神の前における最終的判断を意味するものではない。このようにしてエドワーズは規則や教育による回心を否定し、第三者が霊を判断できるものではないことを明らかにした。¹⁷

それでは聖霊の積極的なしるしはなにか。エドワーズは本書の第三部で、それらのしるしを12項目にわたって詳細に論述しているのだから、簡単に紹介しよう。

第一のサインは霊的ということである。それは世俗の反対概念である。それは人間の身体的な部分に対する霊的な部分というようなものではなく、全体としての自己と神との合一である。霊は真に霊的な人の性格に住まうものであるが、自然人は霊の中に住む感覚をもたない。霊的感覚は新しい創造を通してえられ、魂の新しい基礎となり、新しい理解力となる。この新しい心の傾向は、意志の新しい学習である。霊は心を変え、新しい理解、感情を構成する。

これと関連してエドワーズはリバイバルでの誤りを指摘する。すなわち奇跡的な出来事、なまなましい想像、個人的に語られた声、特別なときに心に浮かんだ聖句、秘密の啓示等は不確定さのしるしである。それらは新しい性格や新しい創造をもたらさない、と。こうして彼は熱狂主義者たちを批判する。¹⁸

第二のサインは神の愛と自己愛との関係である。自己愛は自然人の性格であり、神の恵みに反する。まず神の支配と栄光を承認することが必要である。また人間が神を愛する努力も救いの決定的要素とはならない。まず神が人間を愛し、赦しを与えられることが恵みである。真の信仰は個人の計算からは生まれない。¹⁹

第三は第二への追加であり、神の慈愛は愛の基礎であるということである。それは聖化の美

(beauty of holiness) といわれるものである。聖化は道徳的優秀性であり、自然や道徳的善と区別される。真の信者は道徳的完全性をめざして、その優秀さを愛する。聖化の美は愛であり、五感だけではなく、新しい感覚によってとらえられる。この新しい感覚による神の理解は、個人の魂を深みにおいてとらえ、それによって神を意識するだけでなく信じるに至らせる。従って個人は次のテストをすべきである。「私の感情は聖化の美を把握しているか。神の聖化を美しいと感じるか否か」と。²⁰

第四のサインは霊的理解である。宗教的感情は、理解のための情報と精神が受けた霊的啓示といくらかの光、または具体的な知識によって生じる。感情の合理的基礎は意味と理解を伴うことであり、理解なきところ感情はない。ここでいう理解は自然人に可能な理解とは異なる。それは霊的理解であり、新しい霊的感覚による感動である。観念的な理解は単なる報告または言葉の意味の理解にすぎない。霊的理解はそれ自身新しい感覚または、新しい創造であり、神の美や道徳的優秀性を識別する。ここでもエドワーズは熱狂主義者的な傾向である、心が高ぶり動揺するといった考え方を批判する。²¹

第五のサインは確信である。真実の感情は直接的な確実さを伴う。確信はその人に湧き起こるものであり、直接的に理解できるものである。確信は全体的自己の参与である。確信することによって人は新しい感覚を通して、神を直接的に視る。確信は霊的理解による啓発から起こる。霊的理解があれば、人は霊によって神と福音の真理を確信する。そして神の超越性と栄光が示される。²²

第六のサインは律法的謙遜と福音的謙遜である。律法的謙遜は強要されたものであるのに対して、福音的謙遜は神の恐ろしい性質と偉大さを知ったときに生まれ、自発的な自己否定と自己放棄を伴う。自己否定とはこの世的な喜びと

17. R. A. p. 127ff.

18. R. A. p. 197ff.

19. R. A. p. 240ff.

20. R. A. p. 253ff.

21. R. A. p. 266ff.

22. R. A. p. 291ff.

自己高揚の否定を意味する。この自己否定を実行するためには、靈的誇りを捨てて他人より強い主張をすとか、神の前に進み出るといった要求を捨て去らねばならない。エドワーズはこうした主張の中で、リバイバルでの「靈的に到達した」とか、「偉大で圧倒的な経験」といったことを、靈的誇りとして排除する。²³

第七のサインは回心についてである。回心はまげられた性質から離れて、神に心が向けられることである、という。それには、まず自己の性格の変化が必要である。それは新しい人生の基礎である。新しい性格は自然の熱情を根こそぎ変えることを意味しない。過去の罪と性癖は消えないが、新しい自己は時間の経過を超えて明らかになる。こうして過去は打ち破られる。真の回心は一度で消え去るものではなく、生命の過程を超えるものである。自然の性格の変化に加えて、神に心に向けて歩まなければ、恵みはより深いものにならない。恵みは一瞬に完成するものではない。²⁴

第八のサインはキリストのような性格、すなわち愛、柔和、靈的安定を、第九のサインはキリスト者の優しさをいう。この二つのサインでキリスト者の在り方が明らかになる。²⁵

第十のサインは真の敬虔についてである。真の敬虔は感情の中でのバランスがとれている状態である。希望をもっている人は、確信を十分にもっているのだから、すべての恐れを忘れる。偽善者は感情のなかで不調和と不均衡を示す。真実の敬虔は一度キリストの慰めを受けた後も、引き続いて悔い改め、罪を悲しむことにおいて明らかになる。偽善者は一度慰めを経験するや否や、悔い改めをやめてしまい、その不完全さを示す。そうした人は神を愛するといいいながら、隣人に恨みを抱いたり、または隣り人を愛するが神を愛さない、といったアンバランスを示す。真の聖徒はいつも光り輝くが、偽善者は一時的な光に終わる。²⁶

第十一のサインはどこまでも神を求める感情である。誤った感情は自己満足である。真の信者の偉大さは、それをのり越えようとする。自己満足に陥るとそれ以上に神を求めなくなる。するとその救いは一時的なものとなる。信仰の対象は神であり、その果実が宗教的感情である。²⁷

第十二のサインはキリスト者の実践についてである。人の心は隠されているが、実践は人の性質の徴候を示すものであり、秘密のままにはされない。宗教的感情はキリスト者の実践の中で明らかにされる。その行為は内的、靈的な、恵みの外的サインである。実践は誠実さの確かな証拠である。この世のキリスト者の実践は三つの面をもつ。1. キリスト者の倫理との一致、2. 信仰の実践が人生の主たる役割であること、3. その実践を死に至るまで続けること。

真の聖徒も何らかの罪があり、墮落がある。しかし彼らは神に対する誠実さを持ち続けて、心の新しい感覚をもつに至る。もし彼が神の愛を生活の中心においていないとするならば、悔い改めていない。真の敬虔は、心と性質を変え、たとえ道徳的義務に失敗したとしても、罪を自覚し、神の永遠性からはずれない。実践は、心を示す。問題はどのようにして実践がテストされるかである。エドワーズは最も明らかな答は、人がある行為を行ない、他の行為を避けるということである、という。これが基準から離れていない真の聖徒である。真の信仰は倫理と一致するのみならず、新しい心に一致する。回心が純粹であれば、実践は人生のすべての時を通して継続される。²⁸

この著でエドワーズは、宗教的感情が、神の靈の恩恵として与えられる結果、個人の中に湧きあがり、宗教的生命を与えるものであるとする。それは神と人間の基本的関係であり、信仰の根幹となる。そして宗教的感情のサインをあげるが、それらは、靈的理解を深め、自己愛を断ち切り、聖化の美を反映し、道徳的優秀性を

23. R. A. p. 311ff.

24. R. A. p. 340ff.

25. R. A. p. 344ff.

26. R. A. p. 365ff.

27. R. A. p. 376ff.

28. R. A. p. 407ff.

識別する。つまり、感情は新しい感覚で人の心を更新する。それによって回心者は愛、柔和、靈的安定を示し、謙遜の中を生きる。そして信仰者にとって大切なこととして実践をあげる。リバイバルと共に倫理の重要性が説かれるが、それはこれ以降アメリカのプロテスタントの一つの流れとなっていた。

IV 神の起こされし業

リバイバルが進展していったときに、それに対して批判的な見解も主張された。その中心人物はボストンの牧師、チャールズ・チョンシイ (Charles Chauncy, 1705-87) であった。この批判に対して、リバイバルを擁護して書かれたのがエドワーズによる『現在のリバイバルに対するいくつかの考察』*Some Thoughts Concerning the Present Revival of Religion in New-England* (1742年、以下『リバイバルの考察』と略記) である。この著でエドワーズは、今アメリカで展開中のリバイバルは神の恩寵の賜物であると主張する。この業が神の業ではないと判断する聖書的根拠はない。霊は人間の性格に影響を与えて、人間の弱い状態を圧倒する。リバイバル反対論者は一部を見て全体を考える過ちを犯している。リバイバルが神の業であることを理解するには、この業が人の心に感化を与えていくのを見ることによって、可能であると主張する。

またエドワーズは、リバイバルが今、アメリカにおいて始められた神の特別な業であると論じる。神は愛子イエス・キリストに永遠の栄光を与え給う。それは神が終末を予定される特別な時である。今、終末の時がアメリカから始まる。神はヨーロッパ大陸でキリストを生誕させ、罪の贖業をさせ給うた。今、ここで贖罪の応用が始められたのであり、それはニューイングランドの栄光の夜明けである。²⁹

そしてエドワーズは旧約聖書の各所に見られる信仰の戦士の勝利を引用して、それがキリストとキリストの教会が敵に対して勝利をえた原型であるとする。そのように、福音説教家はこの業のために立ち上がり、神によって勇気づけられて進むべきである。彼らは今が神の時であり、これが神の国に属することであることを知り、それを他の人びとに教え、啓発すべきである。神の眼から見て憎むべきものは、その業が始まったときに不信に陥り、後戻りし、離反することである。³⁰

一方エドワーズは、リバイバル集会に関して、陥りやすい誤りや批判すべき点を次のようにあげる。まず余りにも感情に訴えることである。必要なことは良い感情によって、バランスのとれた啓発をすることである。また会衆に慰めの代わりに恐怖を与えることも批判される。しかし、宗教的集会に時間をかけすぎるという批判に対しては、宗教の外的行為である集会に、神が特別な力と慈愛を与え給うことを、新約聖書を引用して弁護する。また、リバイバル集会で聖書を読んだり、祈ったりすることを子供っぽい行為だとして嫌がることに対して、リバイバル集会の運営には子供らしい知識と裁量が必要かもしれない、とする。そして、たとえ子供らしくても、良い意味を持つかぎり神は彼らを理解したもう、と弁護する。また熱狂主義者に対しては、彼らは無分別と無秩序という心の病をもっているとして批判する。³¹

エドワーズは熱狂主義を含めて、リバイバルの中で最も忌むべきものとして、靈的プライドをあげる。謙遜なクリスチャンはへりくだりと、柔和さ、優しさの中にあり、荒々しさ、他者の侮辱、どう猛さ、苦痛を与えること等を慎む。靈的プライドをもつ者は、自分のしていることが神の靈感を受けたものである、と誤って考えやすい。彼らは自分の行動が、直接的に神からの指示によって動いていると考えて、他者の忠告に耳を傾けない。彼らは聖書にない言葉をつ

29. Jonathan Edwards; *Some Thoughts Concerning the Present Revival of Religion in New-England in The Works of Jonathan Edwards* IV, p. 293ff. 以下 *Some Thoughts* は *S. T.* と略記する。

30. *S. T.* p. 348f.

31. *S. T.* p. 334ff.

くり、新しい啓示とするが、これは聖書と無関係である。³²

他の誤りは、真実の前提から誤った結論を導くことである。真の聖徒は信仰の中で祈り、議論へと導かれる。問題は祈りよりも強い指導力を求めることにある。霊的貧しさを自覚し、謙虚にへりくだることの重要性は神が与えたもうた訓練である。³³

また現在の益が将来の救いの結果を予見するものではないとして、偏見を避け、宗教に反対するこの世と対決することを呼びかけた。また神がある人に成功を与えたかといえ、そうではないと答える。その人がいつも神と共にいるかどうかは第三者には分からない。このようにして『宗教的感情』と同じく、可視的世界での成功が、神の救いの約束に繋がるとは言えない、としている。³⁴

クリスチャンのあり方について、エドワーズは次のようにいう。クリスチャンの性格は自然人と神的なものとの折半である。まったく純粋な霊的クリスチャンは存在しない。種は天から送られ、心に成長するもので、初めから清いものはない。不確かな大胆さ、一時的な熱心さ、経験の退化等は罪の状態に入ることを意味するから注意すべきである。見ゆる教会の中で、他者を非難するのは、非回心者である。他者への意見は勧告ではなく、兄弟の忠告として、懇願の形で行なわれるべきである。³⁵

最後にエドワーズはリバイバルの業の推進の可能性を説く。それにはまず、つまずきの石を取り除くことである。その為に、互いに寛容さを持ち、大きな忍耐をすることが要求される。そして特にこの業に青年が召されていることを強調し、老人が彼らを暖かく見守ることを要請する。またすべての牧師が、リバイバルに対する祈りと確信をもつべきであると説く。そして祈り、聴問、讃美、宗教的集会への参加といった外的な義務を果たしながら、道徳的義務、す

なわち正義、真理、柔和、許し、隣人愛といった倫理への配慮も忘れるべきでない、と訴えて終わっている。³⁶

この著『リバイバルの考察』では、リバイバルをアメリカで始められた終末にむかう神の業として位置づける。そしてリバイバルの中の誤りを正し、それを批判する牧師たちに反論しつつ、『宗教的感情』に見られるようにクリスチャンの謙虚さと倫理を訴える内容となっている。

結びにかえて

本稿はジョナサン・エドワーズによって指導されたノーサンプトン教会に始まり、ニューイングランドにおよんだリバイバルを、彼の三著作を通して考察した。その要点をあげると次のとおりである。

1. エドワーズはピューリタニズムをその源流である回心体験をえることを基本とする福音主義に引き戻した。しかし、その回心体験は簡単にえられるものではなく、一切の自己主張を捨てて、ただイエス・キリストによって救われるという信仰の確立による。そこに至る過程をエドワーズは四段階に分けて説明するが、それはまさに地獄の苦しみである。また真の救いの体験は、繰り返し回心する者となることを意味する。こうしてキリストの福音は毎日の生活の基礎であり、目標となった。

2. 回心者が与えられるのは宗教的感情である。それは神の愛を基礎としている。愛の欠乏は罪である。感情は霊的理解を促し、自己愛を捨てさせ、道徳的優秀性を求める。エドワーズは神の愛を心の中心におく。それは愛の神学ともいえる。そしてそこからの倫理を説く。

3. リバイバル反対論者に対しては、このリバイバルがアメリカで起こされた終末的な神の業であるとしたうえで、指導者である牧師の協力を訴える。そして熱狂主義者や他のリバイバリストの陥りやすい誤りを指摘したうえで、一番危険な誤りを、霊的プライドをもつこととする。そして謙遜な信仰と、他者を傷つけない愛

32. S. T. p. 409ff.

33. S. T. p. 422ff.

34. S. T. p. 432ff.

35. S. T. p. 458ff.

36. S. T. p. 496ff.

の倫理の重要性を説いた。

エドワーズは一貫して敬虔な感情、すなわち神によって生かされる霊的な生命と、神と他者への謙遜な生活を主張するが、この回心体験の重視と倫理性とは、アメリカプロテスタンティズムの二つの特長となっていくのである。こうした点でアメリカ宗教史に一つの転換を与えたのがジョナサン・エドワーズであった。